

インドネシアの看護師の現状とストレス要因

立命館大学応用人間科学研究科

対人援助学領域

家族機能・社会行動クラスター

SIMANJUNTAK JUNIARTA HOTMAULI

インドネシアの病院で働く多くの看護師は慢性的な疲労状況にある。こうしたことを背景にしているインドネシアの看護師の現状を把握するために、本研究はストレスという視点からアプローチし、看護師に共通する一般的な問題の側面と、インドネシア特有の問題の双方から本格的な看護労働研究の調査を行った。調査は西部ジャワ島にある2カ所の病院（RSUD SUBANGとRSU FKUKI）で12名の女性看護師にインタビューを行った。そして、面接データからKJ法によって質的分析を試みた。結果として、インドネシアの医療現場においてストレス要因は、感情労働、設備不足と人手不足、医療機器への未習熟、看護師の知識不足、複雑な治療とケアの仕事がやりにくいことが挙げられた。インタビューの内容からは、看護職の労働条件が劣悪であるということが強く示唆された、また、共働きが多くなっている現状では、看護師が家計を支える必要があり、仕事を辞めたくても辞められない状況にあるということも示唆された。加えて、看護職は女性的な仕事だから、既婚看護師には家族とジェンダーの関係の維持する大切な役割があり、仕事と家族を両立しなければならないというストレスがかかることも明らかにされた。さらに、本研究で得られたインドネシアの看護師のストレス状況にNIOSHモデル（島津明人，2003）を適用した。結果として、インドネシアの医療現場におけるストレス要因が原因となって、看護師が疾病へと進展する可能性を指摘された。このことは将来における研究を継続する視点となると考えている。以上のインタビューの結果に関して、看護師の現状は厳しく、医療現場における看護政策の未整備に由来するストレス状況にあることが確認できた。このまま推移してもインドネシア政府がかける国民の県境状況に関する数値目標は困難だと現場から判断できる。